生者と死者

『新墾』59-1号

秋にしてことさら浄(きよ)く欺かむ王者は死者を死者は生者を

かたはらに訣れの言葉あるかぎりつねにはかなるかなしみはわく

かなしみを盛りし銀盆を両腕にわれの初冬の躓き易し

うそとまことといづれを汝と見極むる日なか吹雪ける中に冥みぬ

妥協とはかなしき言葉雨ならば濡れたきものを傘ひらくなり

蟻のくるぶし　『新墾』59-2号

背かれしことよりさみしく人を得てこの歳月のたひらかならず

逮くしてことさらわれの覗きみる虚なる壷の冷えし膨らみ

待つことのひたすらに冬の夕映や過信はながくわれを躓かす

際疾(きはど)くも極小なるものと確めむ蝿の手の甲蟻のくるぶし

頬をうつ風こそよけれとろとろとゆく径にして更に吹かれむ

冬の檸檬　『新墾』59-3号

白樺（しろかんば）とり巻き荒ぶ丘の風いつぽんの樹立といふはかぐはし

ひと盛りの冬の檸檬の乱売をながらへすごさむために
か贖ふ

水中花風邪熱の瞳に赫（かがよ）ひて裡なる薔薇のいよいよ真
紅

わが夜の自嘲をすこし匂はせて夢にたたまなヘリオト
ローブ

終バスに疲れて帰る貌映す窓にしんしん闇が貼りつく

冬の星

『新墾』59-4号

爪立ちて星のひとつにあくがるる老ゆるより童に還る
あやふさ

宵めつつ説ききかせつつ待つ夜なり満天の星のひとつが絆

黄昏れを歩めばほのか雪匂ふ待つ身にあらねどひたす
らに待つ

しなやかなシルクのストール躯に流しとはなるかひなに
招かれてゆく

イクラとふいのちひと粒なまぐさし人間の不遜口中に
つぶす

絆

『新墾』59-5号

白樺父とぞ思ふやさしさに倚りてぞいくばくの力なる

母よりも父恋ふるこそ血の絆をみなに生みてくれしことの悔い

暮れつがた歩めばほのか雪匂ふ思想を力となす晩年や

街はいま暮れつつあらむ階下より酢の匂ひきて束縛も愛

冬苺スプーンの背なにほぐしつつ青春とはひと生夢のあとさき

春卵

『新墾』59-6号

春卵は身を震ひつつ草に立つまぼろし故に胸すく念ひ

をとこ・をみなその関はりの遠き距離すがしきものと
もて余すなり

蛇口より洩れゐし水は森閑たる夜のただならぬもの
をぞ犯す

春夏秋冬仰ぎ見定むる星の位置ひとりの妻にひとり
のをつと

ふかぶかと着帽の青年ふり向くときすでに壮年の冥き
惑ひ

天秤座

『新墾』59-7号

広がりし隔りかなしも呼び捨てによばれしなくて春を訣れむ

薔薇を煮る香にかめざめし初夏の窓をしきりと打つ青あらし

天秤座に生れし性も塔頭も立つ故さみし風吹くばかり

終生を母でありたし希ひ棉菓子の淡紅つつみて帰る

ふり向きて去りがたくゐる夜の灯のおぼろにあればわが泪ゆゑ

甕のみづ　『新墾』59-8号

血の絆あなどる故のさみしさや庭にあやめ・いちはつ・かぎつばた

水無月のみづゆゑ甕に溢れたりわれはひとらに与ふるばかり

紫陽花に刻々夕べは至りたり今を逢はねばただに逢はねば

呑みこみしもの向日葵の種子と知りてより咽喉は昏くいつも天を向き

薔薇色を真紅と決めてゐるひとりにやたらと届く黄バラ白バラ

恋の未遂

『新墾』59-9号

今日とふ日常おろそかならず棚より零るる藤の百房

恋の未遂あるときはさみしあるときはさばさばあらむ
つゆの紫陽花

丹念に遂げたる恋の行方追ふあるときは母あるときは父

恋に病むをとこひとりのたくはへし夏に美髭(びぜん)の古めかしくて

亡きひとのその志つとに追ふばさらばさらの髪かき分けて

秋雨

『新墾』59-11号

烟るがに所詮は降らぬ秋雨の澄みゆく中のひとつ邪念は

秋水はいよいよ澄めりわが母性保てさうでゐて保ちがたかり

吹くゆゑに無形のものを風と呼び従ふも従はざるも自ら

彼岸花点るがに咲くひとところ死者とならば手を執り踊らう

戦中とふ過去を張り合ふものがたり岩風呂の湯気にひとり賤しぶ

みづからの　『新墾59-T2号

みづからの意志携へてゆくからにきりりと緊まる結球
白菜

歯ざはりよき朝のキャベツのさくさくとわが誇りの唯
一と父を恋ふ

高層の窓にひとつの灯も消えて明日の手筈といつさいの
闇

いつよりし星のひとつがわが伴侶さみしくも自在とふ絆
に足りて

ジャスミンの香気を朝の湯に放ち人間と云ふ華であり
たき